

松井さんのこと

吉 本 道 雅

二〇一八年十一月十三日（火）、松井嘉徳さんが逝去された。

十月の終わり頃、松井さんの同級生、水谷雅彦さん（京大倫理學教授）から「松井がもうあかんで」。具合が悪いことは内緒にされていた。家族だけで過ごしたい、しばらく見舞いはご遠慮いただきたい、とのこと。わたくしどもは若い頃から不攝生のし放題。六十にもなるとそのツケが回ってくる。わたくしなども十年ほど続いたお袋の介護がやれやれ済んでみると、こちらの身體がもうぼろぼろ。もう次は自分の番。二〇一五年十一月の東洋史研究會大會のとき、松井さんに「お袋が死んじゃったよう」と嘆くと、御母堂を引き取って木津に轉居された旨うかがった。お疲れになったのだろう。先輩だから少し先になるのも仕方ない。それから音沙汰無し。十一月二日、史學研究會に來られた谷口淳一さん（京大文藝學教授）に伺うと、メールのやりとりをしているとのことだった。「まだ大丈夫なのか」と、やや安心。ところが、十一日（日）の晝過ぎになって、杉村伸二さん（福岡教育大學准教授）——島根大學時代の松井さんの學生。博士課程は關大で藤田高夫さん（關大文學部教授）の學生。兄弟分の子分なので、わたくしにとって「甥っ子」から、「ずいぶん悪い、見舞いにいって力づけてほしい」

というメール。奥さんの携帯番號が附記されていたので、すぐに電話。奥さんと話すのはほとんど三十年ぶり。わたくしの住む大阪市城東區關目からJR奈良線木津驛前の入院先は電車で一時間半ばかり。病室の松井さんを見たたん、「わっ」と聲を上げそうになった。「もうあかん」状態。手を握ったり、頭を撫でたり、耳をひっぱたりしたが、目を閉ざしたままで、苦しげな呼吸を續けるばかり。いたたまれず一時間ほどで辭去したが、歸り際に、「また來るでえ」と聲をかけるの頷くような動きがあった。聞こえてはいたのだろう。

松井さんと初めて出會ったのは一九八〇年、わたくしが京大文學部三回生で、東洋史學專攻に入ったころ。薄暗い史學科閱覽室の書庫で、長髪、ぼろぼろジーンズの怪しげなのが、線裝本を繰っていた。見るともなく帙の表書きを見ると、何と『逸周書集訓校釋』。すでに先秦史を志していたわたくしは、「徳は孤ならず」と妙に嬉しくなって、「ほお、『逸周書』ですか」と聲をかけたものだ。松井さんは學部では三級、大學院では一級上だった。わたくしが大學院に入った一九八二年から數年間はほんとうに御神酒德利で、松井さんのところに沈没すること

が再々だったので、しまいには「吉本用」の歯ブラシが常置されるようになった。

殷・西周史研究は今日の日本では必ずしも盛んではないが、それでも一九八〇年代には一定の活気があった。戦後半世紀あまり、今世紀初頭までの殷・西周史研究は、おおむね三世代に区分される。第一世代は、貝塚茂樹らの世代である。貝塚が『孔子』において都市國家論を提唱した一九五一年には、『甲骨學』が創刊され、一九六二年には、白川靜『金文通釋』が連載を開始している。第二世代を代表するのは、伊藤道治・松丸道雄らである。七〇年代前半に、松丸「殷周國家の構造」(一九七〇)や伊藤『中國古代王朝の形成』(一九七五)などが公開され、考古學の分野でも、林巳奈夫『中國殷周時代の武器』(一九七二)が公開された。

殷・西周史研究にとって劃期的であったことは、一九七二年に中國との國交が回復し、また一九六六年以來停刊されていた『文物』『考古』『考古學報』などが復刊されて、中國における新出資料が續々紹介されるようになったことである。あわせて、一九七六年には貝塚『著作集』が刊行され、一九八〇年には白川『金文通釋』が第六冊を以て完結し、第一世代の業績が利用しやすくなった。一九八〇年代には、質量ともに飛躍的に向上した資料条件を踏まえ、松丸『西周青銅器とその國家』(一九八〇)・伊藤『中國古代國家の支配構造』(一九八七)、あるいは林『殷周時代青銅器の研究』(一九八四)など、第二世代の大著が次々に公開された。

松井さんなど第三世代が研究を開始したのは、これら第二世代の大

著が公開されつつあった一九八〇年前後。松井さんは伊藤の講義を聴講すべく、神戸大學に通っていた。神戸では木村秀海さんが一緒だった。

木村さんといえば、楽しかったことを悲しく思い出す。一九八八年の暮れだったか、八尾の近鐵百貨店で樓蘭文書の展覽會があり、松井さんと出かけた。書店ではわたくしたちが執筆した『中國書道全集第一巻 殷・周・秦・漢』(平凡社、一九八八年十月)が平積みになっており、「サインでもしよか」とか、はしゃいだものだ。その足で木村さんの八尾の御自宅に押しかけて、白菜の鍋か何かで三人で二升空け、奥さんに呆れられた。

一九八三年は樋口隆康(京大考古)の定年退官の年であった。樋口は一九六三年に「西周銅器の研究」を公開した第二世代の大先輩。大學院演習で「金文研究」を開講していた。松井さんが聴講生、わたくしが三回生のころから、いばって参加していたように記憶する。樋口は退官後、泉屋博古館の館長に就任し、「金文研究会」を開催した。なにしろ雑誌が届くごとに新しい金文が紹介される。應接に暇の無い、疾風怒濤の時代であった。「金文研究会」は、毎週水曜日の午後いっぱい、新出金文を素材に擔當者が研究発表を行う。二箇月に一回くらいは順番が回ってくるので忙しいことであった。

當時のメンバーは、松井さん・わたくしのほか、出入りはあったが、初山明・淺原達郎・閒瀬收芳・佐原康夫・岡村秀典・宮本一夫・Lothar von Falkenhausen・角谷常子・藤田高夫。木村さんもひところ参加されていた。樋口は『泉屋博古館紀要』を創刊し、まずは研究会

のメンバーが泉屋藏品の解題を執筆した。松井さんの最初の學術的著作である「井人人妄鐘」が創刊號に掲載されたのが、一九八四年の三月である。

松井さんは博士後期課程に進級した一九八三年四月から人文研の研究室にも参加するようになった。林巳奈夫が主催する「中國文明の諸源流」、ついで一九八六年からは「古史新證」である。こちらは隔週金曜日の午後いっぱいである。研究成果報告書として、朋友書店を版元に『古史春秋』が創刊され、松井さんも最終號である六號（一九九〇年二月）に「周王子弟の封建」を寄稿している。一九八八年からは永田英正「漢代出土文字資料の研究」、一九八九年からは小南一郎「中國古代禮制研究」が始まり、これにも参加した。

このほか、マックス・ウェーバー『支配の社會學』の讀書會もやった。初山さんがテューターよろしく色々教えて下さった。松井さんは理念型を駆使した社會學の議論の進め方が好きで、また自身でもお得意であった。作品に散見する「オイコス *oikos*」はウェーバー仕込みである。二人で『兩周金文辭大系』友の會をやったこともあるが、西周前期で終わってしまったように記憶する。

松井さんは、一九八三年一月に修士論文を提出した。當時は原稿用紙に手書きである。前年の暮れに「原稿用紙を買ってきてくれ」との電話。京阪墨染驛まで届けると、どてらを羽織った髭まみれの薄汚いのが、くたびれ果てた様子だったが、それでも例の人懐っこい笑顔で待っていた。この修論が一九八四年六月に「西周土地移讓金文の一考察」として『東洋史研究』に掲載された。松井さんの第一論文である。

ついで一九八六年七月には第二論文「西周期鄭（夙）の考察」が『史林』に掲載された。

わたくしどもはものを書くのがなりわいだ、のちの仕事の種子を豊かに孕んだような作品はそうそう書けるものではない。それでも一生に一度か二度はクリオの女神がほほえんでくれる。「西周期鄭（夙）の考察」こそは、そうした作品にほかならない。この論文に孕まれた種子は、それから十数年のうちに、「周王子弟の封建—鄭の始封・東遷をめぐる」（一九八九）・「周王朝の王畿について」（一九九〇）・「鄭の七穆—春秋世族論の一環として」（一九九二）・「縣」制溯及に関する議論及びその関連問題」（一九九三）・「宰の研究」（一九九五）・「西周官制研究序説」（一九九六）・「周の國制—封建制と官制を中心として」（一九九七）・「二〇〇一公刊」・「仲山父の時代」（一九九九）・「周の領域とその支配」（一九九九）に實を結ぶことになる。

松井さんは、二〇〇〇年十一月、これらをとりとまとめた『周代國制の研究』を以て京都大學博士（文學）の學位を取得し、二〇〇二年二月に公刊した。「周王をめぐる問題を議論することによって、都市國家論・邑制國家論あるいは官制研究の成果を取り込みつつ、それらを接合するための新たな地平を見いだす」という問題設定のもとに、西周王朝の國制を「職事命令（「行政」）の秩序」と「氏族制の秩序」の二つの秩序に支えられたものと結論する。

ほどなく、谷口さんから書評を依頼された。二〇〇三年二月に『史窗』に掲載されたが、わたくしの本書に感じた「物足りない點」は次の二つであった。

(一) 本書に提示された「周代國制」には極めてステータックな印象を受ける。二五〇年続いた西周期に變化がなかったはずはない。確かに著者も西周中期の劃期性を随所で指摘するが、第I部の「王身―王位―王家―周邦―四方」なる秩序に關わる記述では、「西周の全時代(時期)」が繰り返される。「王身―王位―王家―周邦―四方」を構成する個々の語彙に相當する觀念は西周前期に遡るとしても、語彙そのものが揃うのは中期、複数を組み合わせ用いることは後期以降。西周中期以降「周的な支配機構が整備」されたのは、それを要するだけの政治社會的矛盾が顯著になったためではないか。「整備」の一環として「文王受命・武王克殷」に於ける正統性を體現した現身の周王に收斂される秩序の觀念が、後期に至ってようやくその表現を得ることで完成したのではないか。この秩序の觀念を典型的に表現するのが、追放の憂き目に遭った厲王の作器であることは偶然ではない。現實の秩序が解體しつつあったからこそ、秩序の觀念を獅子吼せねばならなかったのではないか。

(二) 西周後期を問題にする場合、『竹書紀年』や『國語』『史記』など少なからぬ文獻が存在し、政治史の編年的復元が一定程度可能である。さらに秩序の觀念については、金文とは視點を異にし、かつ豊富な内容を擁する『詩』がある。文獻の後代性を警戒し、安易な使用を避けることは一つの見識には相違ないが、消極的な見識というべきである。一方で、金文がその資料的性格からして、やはり時代の全てを語り得ないことも容易に推測される。金文の秩序觀念を『詩』のそれと對照し、あるいは政治史的推移に位置附けるなど、金文とは性格の

異なった多様な文獻を積極的に活用することで、少なくとも後期については、金文という一つの「場」を相對化し、金文だけでは描ききれない、より立體的かつダイナミックな「國制史」が描けたのではなかったか。

わたくしも四十半ばで血氣盛ん。ずいぶん重たい注文を出したものである。

『周代國制の研究』公刊のち、最初の作品が「經巡る王」(二〇〇三)。「古代王權の誕生I 東アジア編」(角川書店)に收められ、一般向けなだけに、平易な文體で殷から秦までを通觀した好論。

ついで「吳虎鼎銘考釋―西周後期、宣王朝の實像を求めて」(二〇〇四)を経て、「記憶される西周史―迷盤銘の解讀」(二〇〇五)が公刊される。以後の「はじまりの記憶―銘文と詩篇のなかの祖考たち」(二〇〇八)・「鳴り響く文字―青銅禮器の銘文と聲」(二〇〇九)・「西周史の時代區分について」(二〇一一)・「周王の稱號：王、天子、あるいは天王」(二〇一二)・「顧命の臣：西周、成康の際」(二〇一六)といった作品は、「記憶される西周史」に孕まれた種子が實を結んだものといつてよい。クリオの女神が再びほほえんだのである。この論文を契機に松井さんは學者として一皮剥けたようだ。「記憶される西周史」もそうだが、それ以後の作品の表題、妙に艶っぽいものばかりである。一連の作品では、(一)西周時代の歴史的變化、(二)西周史の新しい時代區分、(三)金文の資料的性格、が追究され、また(四)『詩經』をはじめとする文獻が驅使されている。『周代國制の研究』に

對し、わたくしが弄した苦言にもの見事に應答されたものにほかない。

一九八八年に松井さんが結婚すると、さすがに御神酒徳利は解消。一九九〇年には島根大學に赴任。餞はなむけに「君に勸む更に盡くせ一杯の酒。西のかた陽關を出づれば故人無からん」とか吟じたものだ。一九九一年十月のわたくしの結婚式にはご夫婦に出席いただき、その年の暮れに鳥取縣東伯郡の父方の實家に挨拶にいった際には、足を伸ばして松江のお宅で御馳走になった。わたくしは一九九四年から十年間、立命館大學に勤め、二〇〇四年に京大に戻った。松井さんも二〇〇二年に京都女子大學に轉じたが、多忙にかまけてほとんど會うことがなかった。それでもこの間、二〇〇七～〇八・二〇一四年度には京大に出講いただき、二〇〇七年四月の史學研究會例會では「モニュメント」のお題で発表をお願いした（「はじまりの記憶」として公刊）。『東洋史研究』では、かつて出色の論説を英譯掲載する企劃があった。わたくしは一も二もなく「記憶される西周史」を推し、勢いで英譯も引き受けた。引き受けたものの、英語はもとより不得手、まして金文の英譯など狂氣の沙汰。まずは Edward L. Shaughnessy の作品をいくつか和譯してコッをつかんだ上で下譯を作り、Michael E. Jamentz さんに添削いただいた。松井さんも「附言」を寄稿され、これも Afterword to the English version としてあわせて英譯した。「西周史の時代区分について」はその増補版である。ついでしばらく間が空いて、佐藤信彌『西周期における祭祀儀禮の研究』の書評をお願いした（『東洋史研究』七五―四、二〇一七年三月）。

ここ十年は、十一月の東洋史研究會大會に來られた際に少し話すくらいがせいぜいであった。昔なじみはありがたい。何年かぶりでも昨日會つたようなノリで話ができる。二〇一五年四月の樋口隆康の葬儀には、かつての金文研究會のメンバーが集まった。「葬式同窓會」。松井さんは相變わらず元氣で、次の同窓會を主催するとは思ってもよらなかった。二〇一七年十一月の大會で、松島隆眞・山田崇仁・宮本一夫と古代史關係の發表者が並んだためか、松井さんも出席されたが、そのときが話をした最後である。

わたくしにはもう老人性不眠症の氣があつて、九時か十時には眠くなり、三時か四時には目が覺める。二〇一八年十一月十四日（水）未明、めざめると、水谷さんからの十三日深夜の留守電。「松井が逝きました」。ずいぶん苦しうだったので、ようやく解放されたかと正直ほっとした。通夜葬式で配ればよからうくらいの氣持ちで松井さんの著作目録をこしらえているうちに、遺作集の刊行を思いついた。「定年で暇になってからでええから」と、東洋史研究叢刊への寄稿をお願いしていた。その代わりにもなるまいが、かわいそうな松井さんのために何かしたかった。まずは WEB に公開されている著作を集め、スキャンしたテキストデータを整える。お試しに「西周土地移讓金文の一考察」。文字化けを直す。金文は當然化けているので一字一字入力せねばならない。しんどいが供養の寫經だ。しばらく金文から遠ざかっていたのでケツを割りそうになったが、そのうち昔の勘がもどってきた。加えて今では「JK 統合漢字」だの「今昔文字鏡」だので大概の

金文は揃っている。あのころはまだ手書きの原稿、初校は一面ゲタ(II)だらけ。印刷屋がよくもキレなかったものだ。「このゲタを／そらで埋めたら／大學者」。打っていてあらためて氣附いたが、處女作とも思えない丁寧かつテンポのよい文章。「丁寧」は手閒暇の問題だが、「テンポのよさ」は天性の文才である。そのうち、どてら姿の薄汚い松井さんが、あの人懐っこい笑顔で、あの手スキな聲で、熱っぽく読み上げているような氣がしてきた。ほろほろと涙がこぼれた。

松井さんが力を與えてくれたのであろう。暇を竊んでの仕事なので三箇月しかかろうかと思っていたが、一箇月目の十二月十三日までには、『周代國制の研究』以降の全作品のテキストデータ化を完了してしまった。四〇字×四〇行でほぼ二五〇頁、原稿用紙一〇〇〇枚分。それらしくヘッダを付けて両面でプリントアウト、カバーはごひいきの迷盤銘拓本、題字は上品な宋朝體。本の姿が見えてきた。奥さんに送りたいそう喜ばれた。さらに十日ほどで、『周代國制の研究』に用いられていない二〇〇二年以前の作品、九〇頁分のデータ化も完了した。きちんとした校正など、細々とした作業は山積しているが、まあ、一周忌までにはそこそこの本ができるだろう。松井さんはあれで妙に「美」に拘るひとだった。どうせ氣にくわないだろうが、武骨な弟分の仕事、堪忍下され。

歴史を學ぶものは「見ぬ世の人を友とする」。松井さんの「現し身」は煙と化し、魂は「見ぬ世」に行ってしまったが、書かれたものが遺る限り、片想いでも松井さんはわたくしの「友」であり續ける。これからも宜しく。

(佳王卅年十又一月既望庚寅…二〇一八年十二月二十四日)

(京都大學大學院文學研究科教授)